

山室信一『思想課題としてのアジア』

井 上 厚 史

本書は、近代世界における日本とアジアとの多様な関係性を、明快なシェーマ〔基軸・連鎖・投企〕の下に、膨大な史料を駆使しながらまとめられた近年のアジア史研究における金字塔ともいえる浩瀚な研究書である。全編798ページに及び、日本・中国・朝鮮はもちろんのこと、東南アジアやトルコの史料までもが博搜されており、今後の日本史研究やアジア史研究における必読の文献たりうる労作である。

比較法制思想史研究からスタートした著者の研究活動は、処女作である『法制官僚の時代—国家の設計と知の歷程—』（木鐸社、1984）において、明治期に欧米へ留学したエリートたち（法制官僚）の残したテキストの丹念な解読により、欧米近代のどの国やどの理論を手本にすべきかという「模範国・準拠理論の選択」が「知識官僚たちの政策決定や制度形成と緊密に絡み合っていた」¹⁾ことを明らかにした。そして次作の『近代日本の知と政治—井上毅から大衆演芸まで—』（木鐸社、1985）において、石田雄の言語象徴を主軸とする「観念史」研究を

咀嚼しつつ²⁾、国民国家の形成過程の分析から「コミュニケーションのネットワーク」機能の決定的重要性³⁾を見出すなど、著者の関心は一貫して、「思想を思想たらしめている社会的・制度的基盤」⁴⁾や「思想の棲息する場」⁵⁾を形成する多様な関係性＝影響関係を分析することにあつた。

そうした考察の末に溝部英章他『近代日本の意味を問う』（木鐸社、1992）において提起された問題が、近代世界における「思想連鎖」という視角である⁶⁾。

日本近代とは何よりも欧米そしてアジアの諸国との交渉や交流という関係性・相関性において初めて成立するという点こそ、私たちがまず確認しておかなければならない前提である。そして、この前提に立つかぎり、日本近代を対象として、渾沌たる諸事象の中に何らかの因果系をたどっていくための見方なり手続としてまず検討されるべきことがらは、日本近代はいかに他の諸国家・諸国民と交渉・交流し、それによっていかに相互に規定されてきたか、を探ることに求められるだろう。そこに浮上してくる問題が、「思想連鎖」

という視角なのである。

したがって、著者の研究が、まず何よりも思想史研究に対する方法論的反省の上に積み上げられたものであることを確認しておかなければならない。

一般的に日本で「思想史」という場合に想起される「インテレクチュアル・ヒストリー (intellectual history)」⁷⁾、あるいは「観念史 (history of ideas)」⁸⁾を十全に検討した後に、著者はそれら従来の研究方法からは提起されえない問題として、「日本においても伝播ないし継受において世界との同時性がいかなる回路を通じて、いかに進行したかを探り、そこから日本近代の特質を明らかにしていく」という問題群が構想されてきた訳である。

こうした準備期間を経た後に成立した本書は、「日本近代の特質は何であるのか、それは近代世界においていかなる位相を占めてきたのか」という著者年来の問題意識を「思想課題としてのアジア」として真正面から取り上げたものであり、構想から成立に到るまで実に入念な配慮が行き届いた著者の研究の現時点における集大成といえるテキストである。

本書が「アジアへの思想史的問いかけとその視角」として提示するのは、次の三点である。第一は「思想基軸という視角」で

あり、「さまざまな個人の社会的・政治的立場や思想的表明の差異にもかかわらず、それらを通底して思考そのものを規定してしまう機能をもつものであり、他の面からみれば、それ以外の発想を規制・抹殺する要因ともなるもの」⁹⁾と規定され、「文明」「人種」「文化」「民族」などの鍵概念が抽出されている。そしてそれらは互いに結合しあい、「文明と人種」は、「アジアとしての共通の運命性とそれによる欧米への対抗」¹⁰⁾を導き、「文化と民族」は、「共通性のなかにある差異への注目を通して、そこに序列化を設定し、日本の優位性・主導性の主張」¹¹⁾を導き出したことが指摘されている。第二は、「思想連鎖という視角」であり、「ある時代、ある次元での思想・制度が時代を超え、社会を超えて伝わり、衝動力をもって新たな思想や社会体制の変革を呼び起こす原因となり、いかに連動性をもって変化していったかに着目するもの」¹²⁾であり、「アジアとそのなかの個別の政治社会が、地球という全体的な構造のなかで、いかなる思想的な空間配置のなかに置かれているかを見定めるための視角」¹³⁾と捉えられている。筆者が注目するのは、まず「中国を結節環とする西学による思想連鎖」¹⁴⁾であり、次に「日本を結節環とする」欧米の思想・制度導入に関わる、中国・朝鮮・ヴェトナム・タイ・フィリピン・インド・ビ

ルマ・アフガニスタン・インドネシアなどへの思想連鎖¹⁵⁾である。『『西洋の衝撃』という以上に、『日本の衝撃』こそが近代東アジア地域世界を生み出す契機であった』¹⁶⁾こと、そしてアジアの近代を「欧米—日本—アジアという重層的・双方向的な連なりにおいて捉え」¹⁷⁾ることの重要性が指摘されている。第三は、「投企という視角」であり、「認識や連鎖を踏まえつつ、にもかかわらず、現実の対外行動や外交において生じた断絶や飛躍、矛盾を明らかにするための視角」¹⁸⁾であり、近代日本のアジア主義を分析対象として、「日本が既存の地域世界の制約のなかから自らの地域秩序構想をいかに投射しつつアジアという地域世界にかかわっていったのか」¹⁹⁾を明らかにしている。

膨大な史料を駆使して展開される個々の論証について論ずるには、今回与えられたスペースがきわめて限られているため次回を期したいが、これだけ多角的なテーマが膨大な史料を駆使しながらわずか20年にも満たない期間に一人の研究者の手によってまとめられたことは驚異的でさえある。教えられることはあまりに多いが、たとえば第二部「アジアにおける思想連鎖」第七章「国民国家形成と思想連鎖のゆくえ」で展開された、アジア各国の国民国家形成に日本の教育勅語や武士道・国学、また儒教や

陽明学が複合的に作用し合い、各国独自のナショナリズム（「国魂」や「国粹」）が涵養されていったことの精密な分析は、ここまで大規模にしかも広範囲にわたって包括的に研究したものは管見の限り初めてである。アジア各国の国民国家形成における日本漢語がはたした役割も、従来から指摘されてきたことではあったが、本書に掲載されている日訳漢語表（p.468-481）ほど詳細な調査は他に類例がないのではないだろうか。

「思想連鎖」という視角からの精緻な分析とともに、本書を特徴づけているもう一つの論点は、「アジア」の捉え方に関する問題提起である。著者の「アジア」に対する基本的スタンスは、「一七世紀に西洋の世界認識や学術に邂逅して以来のアジアをめぐる知の在り方の変容」²⁰⁾の分析を通して、「西欧を核として生まれた資本主義と主権・国民国家の国家間体系の複合として成立してくる『近代世界』に、アジアのそれぞれの政治社会がいかに組み込まれつつ、それに対抗しながら独自の地域世界と固有の政治社会のありかたを追及してきたのか、という歴史過程を追うことで、アジアという歴史空間の近代における位相を明らかにしよう」²¹⁾とするものである。すなわち、それは基本的に「西洋の衝撃」に対して日本やアジアがいかに対処してきたかという問題設定であり、普遍的と思われ

た近代西洋の思想や文明に対置される「東洋」ないし「アジアという空間」が形成されてくるプロセスを分析することに主眼が置かれている。著者自身の言葉によれば、それは次のように要約される問題である。

思想史研究を課題とするわたしにとってアジアという空間のもつ意味は、今日までにヨーロッパの近代が行ってきたことがどこまで普遍性をもちえるのかということを、日本やそれが係わってきた「アジア」という場から検証していくことにある以上、空間と価値の問題は、今もそして今後とも、課題として考えていかなければならないテーマであり、『思想課題としてのアジア』という標題には、そうした意味合いを込めたつもりである²²⁾。

著者は、再三にわたって、アジア・東洋をヨーロッパ・西洋との二項対立の図式の中で分析することの無意味さを主張し、欧米—日本—アジアという重層的・双方向的な関係性を分析することを重視する。しかし、ヨーロッパ近代の普遍性の検証に力点が置かれている限りは、アジアはいつまでも「西洋や日本に対するアジア」ととどまることになるだろう。近代アジアに関する膨大な史料を博捜し続ける著者であるからこそ、本書に提示されたような知られざる思想連鎖の実態を明らかにしえたことの意

義は十分認めつつも、「西洋の衝撃」や「日本の衝撃」に対応することに終始したアジア像ばかりが提示されることに違和感を禁じえない。

「アジア」という概念が西洋近代によって成立したものである以上、また実際にアジア諸国が一様に「近代化」を目標として国民国家形成を実践して来た以上、「アジア」を考察することは対西洋・対日本を抜きにしては成立しえない問題であることは明らかである。しかし、あらゆる事象が思想連鎖や作用・反作用という視角から語られることは、アジア各国の自主性や独自性、そして何よりも多様性に対する感受性を鈍らせることになりはしないだろうか。

また著者は「二一世紀の思想課題」²³⁾として、「アジア的・東洋的なものの普遍的意義」を模索することを提案している。しかし、今日求められていることはこれまで認識されてこなかった「他者としてのアジア」、すなわち「西洋近代への対抗ではないアジア」を認識することではないだろうか。近代の産物であるアジアを脱構築すること、すなわち西洋への対抗ではない「アジア」、中華帝国が作り出した「中華」や日本帝国が作り出した「東亜」ではない脱中心化した「アジア」、多元的文化的発展を許容する「アジア」、国家という境界にとらわれない流動的な「アジア」、要す

るに「西洋を基準としないアジア」を認識することこそが、「二一世紀の思想課題としてのアジア」に他ならないと思われる。

本書で提示された「思想連鎖」と「アジア」という二つの大きな問題は、読者に慎重な対応を要求するきわめてデリケートな問題であることを忘れてはならない。なぜなら、「西洋の衝撃」「日本の衝撃」によるアジアにおける思想連鎖を検証することは、戦前の日本の帝国主義・植民地支配・「大東亜共栄圏」の歴史を掘り起こすことと紙一重の作業であるからである。もちろん著者は戦前の日本が「口にアジア主義、手に軍刀による統治」²⁴⁾によってアジアを支配していたことを十分に認識した上で、史実としての思想連鎖を跡付けている訳であるが、日本以外のアジア諸国の歴史認識には「清算されない過去」が厳然として存在していることも事実であり、「アジア的なものの普遍性」を志向することは、ただちに「大東亜共栄圏」の悪夢を想起させるものである。思想連鎖の結節環としての日本と、大東亜共栄圏を幻想しアジアを悲劇に陥れた日本とは、まさに鏡の表裏であり、切り離すことはできない。

「思想課題としてのアジア」とは、それほどデリケートな問題である。本書が総力を挙げて構想した史実としての近代アジア思想史を、今後いかにして中国や韓国など

いわゆる北東アジア諸国の研究者と共有することができるか。それはまさに、研究者一人ひとりのアジア認識が試される場であり、各国の歴史認識やナショナリズムが激突する場である。史実としての思想連鎖と「清算されない過去」をいかにして共存させるか。誰もがいかにして「アジア」を相対化させることができるかという課題から逃れることはできないのであり、この浩瀚な著書のどこを探しても、その答えは書かれてはいない。それゆえ、この著書自体が、アジア史研究の「思想課題」として私たちの前に提示されていると考えるべきである。

著者が改めて確認するように、「私たちはアジアとともに生きなければならない」²⁵⁾。しかしそれは、性急に「欧米化した社会が喪失したものを恢復する希望態としてのアジア」²⁶⁾や「人類文化の最前線を疾走する可能性としてのアジア」²⁷⁾を求めるのではなく、まず＜統一体としてのアジア＞を脱構築することから始めなければならないのではないだろうか。アジアの多様性を認識し、単線的ではない歴史を、脱中心化した関係性を、そして何よりもこうした認識をアジア各国の歴史研究者と共有できるように努力すること。それこそが、この著書が提示する最大の課題であると思われる。

1890年代に形成されたアジア認識の基底にある「日本・東洋・西洋という枠組み」

は今なお存続しつづけ、「日本史・東洋史・西洋史」という区分が保持されている。「問われているのは、まさにその区切り方の枠組みや世界を見る視角」²⁸⁾であり、そうであればこそ、西洋という基準から離脱した所に姿を現す「アジアの実像」を認

識することが必要なはずである。

今後進展が予想される北東アジア研究に従事するあらゆる研究者にとって、本書は研究者の歴史観や方法論の真摯な試金石として受け止められるべきテキストであるだろう。(岩波書店、2001年刊)

注

- 1) 山室信一『法制官僚の時代——国家の設計と知の歷程——』(木鐸社、1984) p.59。
- 2) 山室信一『近代日本の知と政治——井上毅から大衆演劇まで——』(木鐸社、1985) p.194。
- 3) 同、p.150。
- 4) 同、p.184。
- 5) 同、p.186。
- 6) 『近代日本の意味を問う』(木鐸社、1992) 所収、山室信一「知の回廊」p.116-7。
- 7) 『法制官僚の時代——国家の設計と知の歷程——』p.379。
- 8) 『近代日本の知と政治——井上毅から大衆演劇まで——』p.192およびp.196。
- 9) 山室信一『思想課題としてのアジア』(岩波書店、2001) p.8。
- 10) 同、p.9。
- 11) 同上。
- 12) 同、p.13。
- 13) 同、p.13。
- 14) 同、p.17。
- 15) 同、p.15。
- 16) 同、p.16。
- 17) 同、p.20。
- 18) 同、p.23。
- 19) 同、p.26。
- 20) 同、p.635。
- 21) 同上。
- 22) 同、p.656。
- 23) 同、p.653。
- 24) 同、p.631。
- 25) 同、p.657。
- 26) 同上。
- 27) 同上。
- 28) 同、p.639。

(Atsushi INOUE)